

私たちが リノベーションを 選んだ理由。



——新築でも、賃貸でもない——

「リノベーション」という選択に踏み出した人たちがいます。その理由を知りたくて、2つのおうちを訪ねました。なぜ、あえて手間も時間もかかるリノベーションを選んだのか。そこには、単なる間取りの工夫やデザインの話だけではなく、暮らしへの深いこだわりや、家族の価値観がありました。古い建物の壁や柱に残る過去と、新しく塗り重ねた未来の景色が、ゆっくりと溶け合っていく。

「住まい」とは何か。その本質を、静かに語ってくれる家。この特集では、そんな物語を丁寧に紐解きながら、彼らの「選択の理由」に迫ります。

/ 私たちがリノベーションを選んだ理由 /





どう生かすか、どう楽しむか 考えることが好きだから、 リノベ暮らしはとても幸せ。

Nさんご夫婦 ・ 三豊市在住

｜ 設計・施工 ｜ (有)谷口工務店

1. 日常のひとコマを特別にするウッドデッキ。「夕暮れどきや家の明かりが灯る夜の雰囲気もいいですよ」と奥さま。
2. ダイニングセットやキッチンの背面棚も谷口工務店による特注品。暮らしと空間に合わせた造作家具は実用性の高さに加え、自分らしいライフスタイルも叶えます。
3. 建物の歴史を静かに伝え、家族を見守る重ね梁。当時のままの構造美を生かしつつ、傷んだ柱梁は交換・補強。

「母は、ここにあるものをどうやって生かすかを考えるのが得意なんです」。そう語るのは月に1〜2度ご夫婦の住まいに顔を出すという娘さん。昔から発想力が豊かで、いろいろな暮らしの楽しみ方を実践する母親の姿を見てきたからこそ「牛舎だった納屋をリノベーションしたい」と言ったときも、すんなり受け入れられたそう。長年連れ添ってきたご主人も「引き受けてくれる工務店があればやってもいいよ」と、奥さまの思いをやさしく後押し。しかし、実際にアプローチしてみると返ってくるのは「これは解体して新築にした方がいいですよ」という答えばかり。そんななか救世主となって現れたのが、納屋のリノベ経験を持つ谷口工務店でした。

自分の夢を叶えてくれる工務店に出会えたことがうれしかったという奥さま。「私がリノベーションを思い立ったきっかけは、この家に嫁いだときから気に入っていた立派な梁。この梁を生かした空間を作ることができればずっと素敵だろうなって、ずっと思っていました。だから、大丈夫ですよと言ってもらえたときは本当にうれしくて。私たちに寄り添いながら話を進めてくれるスタンスにも好感が持てて、すべてお任せすることになりました」。

築90年の納屋は牛舎としての役目を終えたあと、農業用倉庫として使われ、作業のための軽トラックが通り抜けできるようにもなっていたそう。そのために大がかりな改装が必要だったものの、しっかりとした骨組みと豊富な知識を持った職人の技術により美しく再生。暮らしの中心となるLDKは、豊かな味わいを持つ梁を主役にした吹き抜けデザインを採用し、キッチンやパントリーを新設。水回りや寝室、収納は夫婦ふたりで使いやすいよう小回りの利くレイアウトに。また、立派な梁とともに調湿性や蓄熱性のある土壁もそのまま再利用。高性能の断熱材やガラスサッシと組み合わせることで、四季を通じて快適に過ごせる住環境に生まれ変わりました。

「夏はエアコン1台、冬は小さなストーブだけで充分。大きなダイニングセットをオリジナルで作ってもらったおかげで、子どもや孫たちと一緒に食卓を囲むのが楽しみになりました」。





Special Interview

KOTO VEGAS

×

(株)谷本建設

琴平の“シャッター商店街”に再び人の流れを——
それぞれの想いをつなぐリノベーションで
「地域まるごとホテル」プロジェクトに挑戦！



(株)地方創生 代表取締役社長
近江 淳さん

埼玉県出身。大学卒業後、3社の勤務経験を経て2008年に起業。2014年よりパソナグループの一員として地方創生に力を注ぐ。趣味はエアロビクス。

(株)谷本建設 専務取締役
谷本 和也さん

香川県出身。地元の高校を卒業後さまざまな職種を経て家業へ。住宅建築の傍ら2022年に1棟貸し「囲炉裏の宿 木乃古」をオープン。趣味はハーレー。

空き家再生でまちに息吹を 琴平発・リノベーション対談

——なぜ地域活性の舞台に琴平町を？そしておふたりが出会ったきっかけは？

近江・私たちは、地域が抱える問題を現場に赴いて解決するという信念を持ってシテイプロモーションを手掛けています。たとえば、人口減や高齢化で閉店したままの「シャッター商店街」も課題。全国各地にありますが、琴平の場合、すぐそばの表参道には今も多くの往来がある。それなら商店街の端っこが賑わうことで人の流れが変わり、波及効果で間にあるシャッターがひとつずつ開くのではと期待しました。観光地としてのポテンシャルと住民のための商店街、両方を担うモデルケースを目指すのが「地域まるごとホテル」プロジェクトです。

谷本・知り合ったのは2年前、物件を探されている頃ですよ。

近江・当時は悠長でしたね（笑）。コロナ禍前に空き家のリノベ開発で文房具店とブルワリーをオープンしましたが、新たな事業となる今回はさらに2つの商店と宿泊施設を構想。ゲストハウスのノウハウも知りたくて、一緒に地域活性化に取り組んでいる琴平バスの楠木社長に「囲炉裏の宿 木乃古」のオーナーでもある谷本さんを紹介してもらいました。

谷本・楠木さんとは中学校の同級生で、「町歩きしよう！」と気軽に誘われて。近江さんが誰かも分からず、街歩きの参加者だと思ってフランクに喋っていたと思います。

—— 築古物件が並ぶ商店街で、
新築ではなくリノベーションにこ
だわった理由は？

近江・既存の建物を生かすという
理念のもと、地域に長く愛されて
きた商店街の趣を残したかった。
だから、建て直すという選択肢は
ありませんでした。「町のためにな
るなら」と交渉に応じてくれた大
家さんの気持ちにも報いたくて、
谷本さんと一緒にがんばらなきゃ
と思いました。

谷本・押せば揺れるような物件も
あり、職人さん全員が「本当に直
すの？」と。普通なら間違いない
新築を提案しますが、近江さんの
「リノベしか考えていない！」とい
う想いに応えたかったし、それが
やりがいにもなりました。

—— 苦労や感動など、印象に
残っているエピソードは？

谷本・完成までの過程が非常に大
変で、解体中は強風のたびに倒れ
るんじゃないかとドキドキ。部分
解体と補強の繰り返しで現場に通
い詰めだったので、もはや「琴平
の人」にならかけていたかも。狭
い商店街での工事に不安もありま
したが、何よりご近所さんの協力
が大きかったです。工事車両の通
行中は植木鉢をよけてくれたり駐
車場を貸してくれたり。夏にスイ
カを差し入れてくれたこともあり
ました。近江さんたちが良好な関
係を築いてくれたからです。
近江・いえいえ。谷本さんには無
理ばかり言いましたが、自分の想

像以上のことを叶えてくれた。長
年の家づくりや宿の運営を経験さ
れているからこそだと思います。
あの巨大なオブジェも当初の設計
ではなく、香川の昔話に登場する
鬼を、伝統工芸の「讃岐一刀彫」
をオマージュして町のシンボルに
したいとお願いしたんですね。

谷本・はい、まさか自分の仕事だ
と思いませんでした（笑）。ぶ厚
い断熱材を何十枚も重ねて削り出
すのはひと苦労でしたが、重さ
400kg（！）の鬼を近江さん
たちと運び入れたことは忘れられ
ません。

—— 今回のプロジェクトを機
に、それぞれが思い描く未来は？

近江・江戸時代は「一生に一度は
こんびら参り」といわれ、琴平の
門前町で飲んで食べて歌って：楽
しむのが庶民の憧れでした。それ
で、娯楽施設が集まるラスベガス
みたいだなと。「コトベガス」と名
付けたのも、そんな賑やかな街に
したかったからです。リノベで人
が活躍できる場を作り、集まる人
たちを結び付け、また新たなプロ
ジェクトを生み出したい。それが
地方創生の本質だと思っています。
谷本・「コトベガス」が香川県全体
を活性化するきっかけになればい
いですね。それに、商店街の再生
で街の明かりが増え、真っ暗だっ
た路地が歩きたくなるような小道
になったんですよ。防犯面におい
ても貢献できると感じたので、出
身地の坂出でもリノベによる地域
活性化を進めたいです。

昭和の面影残す商店街の建物が 現代的な店舗に生まれ変わるまで

新築と異なり、リノベーションは既存の構造をどう生かすかがカギ。
ビフォア・アフターを見比べると、施工の努力と技術の高さが伝わってきます。

AFTER



BEFORE



昭和初期に建てられた、新町
商店街の3棟の空き店舗。建
物同士が密接しています。

3棟を一体化したデザインにリノベーション。BEFORE
を知らないと、最初からひとつの建物だったかのように
見えますが、屋根の高低差に名残があります。右から
The TeaRoom、ONI ROOM、Bagel Houseと、
実際に異なる店舗として運営されています。

BEFORE



高低差のある入り口をど
う使いやすく整えていく
か、間取りの見直しも
課題でした。



縁側や床の間など、昔の
日本家屋ならではの設計
を生かしつつ、ガラリと変
身させていくのがリノベ
ーションの醍醐味です。